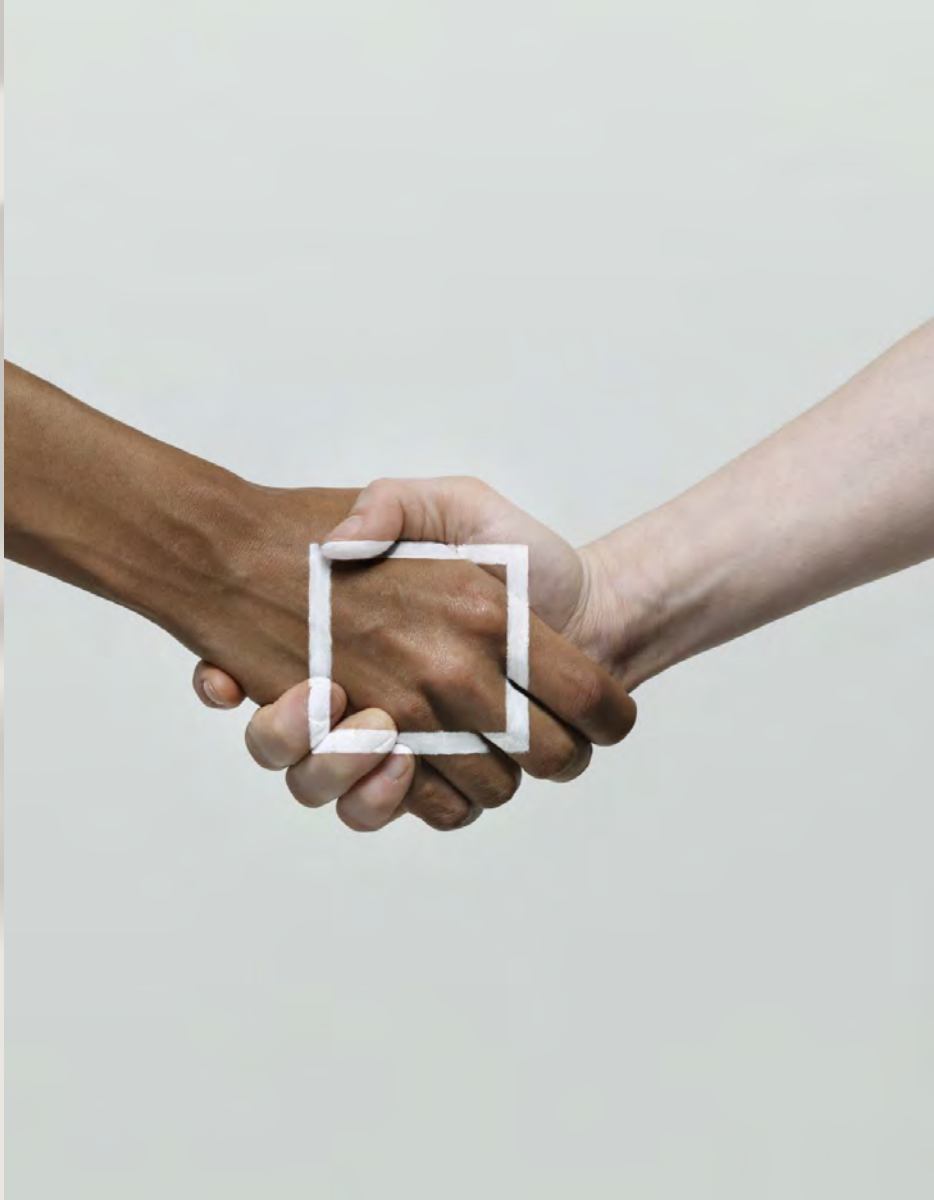


# 和解学の可能性

- 日本学術会議主催 学術フォーラム
- 「欧州とアジアの地域紛争をめぐる平和的解決と世界経済の行方-学術共同の観点から-」
- 劉傑・早稲田大学



# 科研：和解に向けた 歴史家共同研究ネット ワークの検証

新学術領域研究「和解学の創成—正義ある和解を求めて」の一部として、日中韓及び台湾の歴史家の間で形成されたネットワークに対する検証を通して、「歴史和解」と「和解学」に貢献する歴史学のあり方を探求。

# 和解学とは

広義の「和解学」：かつての対立と紛争を和解と平和に導く学問（哲学、心理学、歴史学、政治学、社会学、経済学など、従来のさまざまな学問領域に依存する学際的な学問）。

歴史学に於ける「和解学」：歴史問題が足枷となって和解と平和を妨げているメカニズムを解明し、未来に向けた和解の方法論を提示する学問。

# 和解学が構想された背景

---

講和条約や共同声明によって政治的次元での和解は一度達成されたが、国民レベルでの和解プロセスは、戦後70数年経っても迷走し続けている。

---

領土・貿易・文化などで国家間の摩擦が発生すると、外交問題が歴史問題化され、「歴史認識問題」が雪だるま式に膨らみ、国民レベルでの和解を一層難しくする。

# 歴史家たちが努力してきたこと 第1ステージ：交流



- 1990年代以降、東アジア地域において、民間の活発な学術交流に促されて、政府が後援する多様な歴史家ネットワークも形成された。これらのネットワークを経由して、各国の歴史研究の状況が共有され、歴史に起因する国家間の対立と歴史学との関連性が徐々に明らかになってきた。これにともなって、歴史家が歴史和解に貢献する役割も活発に議論された。
- 『国境を越える歴史認識：日中対話の試み』（東京大学出版会、2006年）
- 『1945年の歴史認識』（同、2009年）
- 『対立と共存の歴史認識』（同、2013年）



# 歴史家が目指す第2ステージ：「知的和解」の追求

## 和解の3つの局面

- 1 第一の局面は国家の戦略的思考から達成される政府間和解：国益に基づく判断で後退することも。
- 2 国民レベルの感情的和解：政治的な要素に影響され、後退しやすい。
- 3 公共知と共有する平和の価値に基づく「知的和解」：未来を共創する和解



# 「知的和解」を追求する3つの実践

①歴史家ネットワークを「知のプラットフォーム」に発展させる。

②「和解」の歴史に光を当て、それを共有する。

③多様な歴史解釈を包容しつつも、平和の価値を共有する歴史学（「新史学」）を創出する。

# 実践1：歴史家ネットワークを「知のプラットフォーム」に

①日本、中国、台湾、韓国の歴史学者によって形成されたネットワークを検証

歴史家は紛争、対立、及び和解の歴史事実を解明し、歴史和解に貢献できるが、歴史家の研究姿勢によっては、歴史和解を阻害することもありうる。そのために、多くの研究者が国境を越えて歴史家ネットワークに参入することにより、「一国中心史観」から脱却し、多様な価値観を受け入れる寛容な態度を養成してきた。インタビュー記録に基づいて、また、人物の交流史を通して、ネットワークの機能と効果を検証した。

②歴史家ネットワークを公共知を創出する「知のプラットフォーム」に発展させる方法を提案。例えば、「和解の歴史」をめぐる国際的共同研究は、「知のプラットフォーム」での共同作業である。



# 実践 2 : 和解の歴史にひかり

- 東アジアの近代史は対立と和解の歴史。
- 対立と和解の近代史を検証することは、今日の歴史和解と「和解学」の成立に貴重な参考を提供する。和解対象国ないしは友好継続国の、内的論理に注目した。
- 和解に至る、もしくは続けるためのプロセスを「縦軸」に設定し、なぜ和解が困難な国と、比較的容易な国があるのかを探った。
- 一方、考察の「横軸」を外交、政治、軍事面に限らず、文化、経済、人的交流の面にも拡大して、縦軸と横軸の共鳴から新たな和解の地平が生まれることを提案した。
- このような歴史研究を和解学の基礎的研究と位置づけ、和解学に不可欠な歴史的経験を提供した。

# 実践 3 : 「新史学」の創出

- 「和解学」が対象とする事柄（対立）の誘因は「歴史」そのものであるため、歴史学は「和解学」と不可分な関係にある。
- 「和解学」に貢献する歴史学の実践：
  - ①平和の価値に基づく歴史像の創出
  - ②歴史と政治の分離法の確立
  - ③歴史家共同体の構築
- 以上三つの実践の過程こそ、歴史学が他の学問分野とともに「和解学」に貢献する歴史実践である。この実践のなかで生まれる新しい歴史学は和解学に貢献する歴史学であり、いわゆる「新史学」である。

# 新史学の特徴

- ①歴史資料のデジタル化とインターネットを介した資料公開の拡大に伴って発生した歴史学の大衆化に対応する歴史学
- ②感情記憶を歴史化する方法論が確立された歴史学。
- ③グローバル・ヒストリーの有効性を認めた歴史学である。
- 今日の歴史学は、「大衆化」「多様化」「グローバル化」という時代の激変に遭遇している。これらの変化に対応する歴史学でなければ、「和解学」に貢献できない。